

令和3年9月1日

# 敬愛短大附属幼稚園だより 9月号

コロナ禍の多くの困難な状況の中で開催され、世界から多くのアスリートが集まるオリンピックが終了し、パラリンピックへと目指している開催の大きな意義や精神が引き継がれます。

一方、世界各地を見ても、気候や気象の大きな変化や、各種の災害に見舞われて多くの方が被害にあって苦しんでいることを考えると一日も早い復興と普段の生活に戻ることができることを祈らずにはられません。

こうした中ですが、附属幼稚園では2学期が始まり、子どもたちは様々な経験と喜びを感じながら一段と成長していくことと思います。

## 「自信」が持てる子はどのようにして育つのか

「私は自信がない」「自信が持てないのでできない」等、良く聞かれる Word ですが、今回は『自信』ということばに焦点を当ててみました。

「自信」とよく似た意味のことばに、「自己肯定感」があります。この「自己肯定感」は、自分の弱さや短所も含めて、丸ごと自分のすべてを自ら受け入れるというものです。自信がないと思うと何ごとにも積極的に関わろうとしなかったり、一歩も二歩も引いてしまったりして先に進むことができなくなります。自信があるとは、自分に OK が出せる状態のことです。

では、そうならないため「自信をつける」には、いつどの様にしたらよいのでしょうか。産まれたばかりのあかちゃんにはまだありません。「自信」、それは幼児期の環境で育まれます。

ところで、皆さんは人から褒められたことはありますか。どんな形でも人から褒められたことはあると思います。幼児期に周囲の大人たちを含む人から自分の存在を認められ、自分は愛されていると人の愛情を感じた経験はあるのではないのでしょうか。幼児期のこの愛情の経験こそが思春期や大人になってからの「自信」につながるのだとしたらどうでしょう。

自分が周囲から認められることにより、人を信頼し、その環境の中で人は「自信」を身につけて行きます。ただ、ここで誤ってはならないのは、安易に子どもを褒めればよいということではありません。最も良くない褒める行為は条件を付けて褒めることです。

具体的には「何々をしたら、あるいは何々が出来たら良くできたね」などと褒めるという行為です。このように条件付きの大人の承認を繰り返されながら育つと、大人になってからも「自信」が持てないという人が多いというデータがあります。ましてや、幼児期に叱責や注意ばかりを受けて過ごす先ほどの自己肯定感がなくなり、常に他人の視線を気にする自信の持てない大人になる確率が高くなります。

一方、幼児期に自分の存在を周囲に認められて育ってきた子どもは、自分という存在を常に感じ、心から褒められて周囲の人からの愛情を感じることができていると自分という存在を正しく認識できます。

マイナスイメージという状況を常に持ってしまったたり、マイナス思考になってしまったたりすると、いくら行動力や様々な力を持っている人でもその本来の力や能力を発揮することができません。

このようなことを考えれば、幼児期にスタートする「自己肯定感」や「自信」につながる、褒めるといふ大人の行為がいかに重要であるかお分かりいただけたのではないのでしょうか。幼児期の子どもの資質に影響を与える大人の行為がその後の子どもの成長に大きな影響を与えるのですから、私たち大人は相当重要な影響力を持っているということになりますので、大人が大人であるということが子どもたちの資質を育む最大の鍵ということになります。

(園長 杉山清志)